様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５００７０３

研究課題名（和文）西欧近代三育主義教育の身体への歴史的回顧と身体教育論の再構築

研究課題名（英文）The historical reflection on the early nineteenth-century physical education :with reference to modern education on intellectual, moral, and physical education in contemporary European countries

研究代表者
榊原　浩晃（Sakakibara, Hiroaki）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：５０２５５２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、西欧における身体教育の用語出現の時期に遡り、その系譜を跡づけ、日本への受容に関する時代的特徴を明らかにすることを目的とした。西欧近代教育における三育主義の端緒は19世紀初頭まで遡り、教育実践家・教育論者によって唱えられていたことを追跡した。日本においても、三育主義教育の身体や身体教育は、ハーバート・スペンサー以前の影響がしばしば見られ、このことも新資料の発掘を経て明らかにされた。
　西欧三育主義の端緒を探るとペスタロッチとそれにつながる人々(ペスタロッチ、ジュリアン、ビーバーら)の身体教育論やその主張、あるいは実践が存在し、やがてスペンサーにたどりつくまでの系譜が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the genealogy trace retroactively to the time of the term appearance of the physical education in Europe. This study traces the use of the term and concept of physical education back to the time of the appearance of this kind of education materials in Europe in order to clarify the characteristics of physical education as it was later introduced in Japan. The beginning of modern education in European countries dates back to the early 19th century; this study considers theories and practices advocated by Johan Heinrich Pestalozzi, Marc Antoine Julian, George Eduard Biber, and other educational practitioners and commentators. In Japan, the influence of of Herbert Spencer was often seen in education debates, especially in the area of physical education. On the basis of the excavation of new materials, this study tries to place it in its proper context by illuminating the important influences of Pestalozzi, Julian, and Biber in context as well.

研究分野：身体教育学・身体運動文化論

キーワード：近代教育　三育主義　身体教育　西欧　明治期

１．研究開始当初の背景

(1) 知育・徳育・体育論として唱えられる三育主義は、スペンサーの著書（『知育・徳育・体育論』1861 年）を根拠に言及されることが多い。しかし、それ以前の時代から、近代教育における三育主義は語られてきた形跡が存在する。それらを解明することが、現代の教育事情にも通じることとなる。近代教育論の中で言及される三育主義の端緒は、どこにあるのか、その中での身体教育の位置づけを探ることが、今日における身体教育のあり方を考えるためにも必要となる。

(2) 近代以降、教育論の中で、知育、徳育、体育の三育主義は、いつから、どのような人たちによって主張され、教育論としてどの程度汎用性と実用性を有していたかを解明することが将来的にも必要となる。

２．研究の目的

(1) 本研究は、西欧三育主義教育における身体教育の用語出現の時期に遡り、その系譜を跡づけ、文献や資料の蒐集につとめ、近代の教育論の中での位置づけを探ることを目的とした。

(2) 日本への受容に関して、スペンサーの著書（『知育・徳育・体育論』1861 年）を称揚して説明されることが多い三育主義について新たな資料の発掘により解明すること、およびその時代的特徴を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1) 西欧近代教育における三育主義の記述上の端緒は 19 世紀初頭まで遡り、ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ、マルク・アントワーヌ・ジュリアン、ジョージ・エドアルト・ビーバーらの教育実践家・教育論者によって唱えられていたことを追跡調査した。

(2) 日本においても、三育主義教育の身体や身体教育は、ハーバート・スペンサー（スペンサーの著書『知育・徳育・体育論』1861 年）以前の影響がしばしばみられ、このことも新資料の発掘を経て研究を深める方法をとった。したがって、西欧においてスペンサーの哲学の中での位置づけを探ることが必要となった。スペンサーの資料の中で、どこに三育主義の記述上の端緒が見いだせるか、この点を研究方法として加味した。

(3) 西欧においては、三育主義は、必ずしも英語圏の文献には限定されない。西欧の言語文化圏の中での三育主義の影響を吟味するために、英語、フランス語、ドイツ語等の文献を渉猟し、資料調査を遡及して研究を実施した。

４．研究成果

(1) 研究成果の記述にあたって

本研究課題のような研究は、欧米の古参の文献を資料として発掘したり、その内容を解読したり、集約したりしている。文献情報は、平易に括弧付き（『　』）にて日本語で簡略的にしたが、欧米の文献情報としては原語表記も不可欠となる。したがって、これらも(　)の中に記載した。

(2) 三育主義教育の記述上の端緒

①ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチの教育学

まずはペスタロッチの教育学をなす諸論文から身体そのものや身体教育への言及箇所を渉猟してみた。『シュタンツだより』1799 年（*Pestalozzis Brief an einen Freund über seinen Aufenthalt in Stanz*, 1799）、『メトーデ』1800 年（*Die Methode*,1800）、『ゲルトルート』1801 年（*Wie Gertrud ihre Kinder lehrt*,1801）、『メトーデの本質と目的』1803 年（*Denkschrift an die Pariser Freunde über Wesen und Zweck der Methode*, 1803）、『民衆と産業教育』1807 年（*Über Volksbildung und Industrie*）、『基本体操』1807 年(*Über Körperbildung als Einleitung auf den versuch einen Elementargymnastik im einenreihe Körperlichen Übungen*,1807）、『基礎陶冶の理念』1809 年、（*Über die Idee der Elementarbildung*, 1809）の中でペスタロッチは身体そのものや身体への教育的配慮について言及している。明確に知育、徳育、体育の相互の関連に言及しているのは、1803 年の『メトーデの本質と目的』であろう。1807 年のいわゆるペスタロッチの基本体操をめぐっては体育史の研究からも多くの研究があるが、その中でも「身体に関する知識の教育」をなしているという指摘をした坂田祐子氏の研究成果が存在していた。

②ペスタロッチの三育主義教育の影響

『ペスタロッチの教育方法の基本』1812 年（*Esprit de la méthode de Pestalozzi*,1812）の著者として知られるジュリアンには、もう一つの大著がある。それが、マルク・アントワーヌ・ジュリアン著『身体、道徳、知性の一般教育』1808 年(Marc Antoine Jullien(1808), *Essai General D'Education Physique, Morale et Intellectuelle*)である。この本が三育主義の教育に関する最も古い文献ではないかと考えられる。つまり、ペスタロッチの三育主義教育は、ペスタロッチ教育にゆかりの人々によって、西欧の各地に普及していった。イギリスではエドアルト・ビーバーがペスタロッチの教育を継承した１人であったとみてよい。『ゲルトルート』の英訳は、ビーバーによってなされたが、ペスタロッチの弟子ニーデラー(Johannes Niederer)の考え方に傾倒し、ペスタロッチの思想との齟齬をきたしていたと批判されている。その書が『ヘンリーペスタロッチと彼の教育計画』1826 年（Eduard Biber(1826), *Henry*

Pestalozzi and His Plan of Education: An Account of His Life and Writings）である。

(3) 英語圏の身体教育論に関する単行本とその記述内容

①身体教育論に関する単行本の遡及

副題であるが、physical education と題する古参の資料にメーソンの『運動の効用』1827 年（Martin Mason(1827), *On the Utility of Exercise; or A Few Observations in the Advantages to be derived from its salutary effects, by means of Calisthenic Exercise, as approved of by some of the most eminent gentlemen of the faculty in London, and the only lady in England purposely taught by him, in order to instruct Ladies in that essential Branch of Physical Education*）がある。書名の副題の最後に Physical Education とあるので PE のタイトルのついた単行本としては貴重である。1 年後の 1828 年に出版されているヴォアリノの『体操書』1828 年(Signor Voarino(1828), *Second Course of Calisthenic Exercises; with a Course of Private Gymnastics for Gentlemen; accompanied with a few observations on the Utility of Exercise*)と共に、イギリスにおける初期の体操指導者クリアス(Phokion Heinrich Clias)の体操内容を紹介したものである。

英語の PE の単行本としてサムエル・スマイルズ『身体教育：子どもたちのありのままの姿と体質研究にもとづいた養育と管理』1838 年 (Samuel Smiles(1838), *Physical Education ; Or, The Nurture and Management of Children, founded on the Study of their Nature and Constitution*)という書が初期の PE 関係本として挙げられる。さらに、本研究の科研による遡及調査では、1836 年に同じエジンバラで出版されていたチャールズ・コールドウェルの『身体教育の思想』1836 年(Charles Caldwell(1836), *Thought on Physical Education*, 1836)が発見された。なお、何らかの事情があって、ギリシャ語・ラテン語研究の書と合本になっている。アメリカの医学者であるコールドウェルは、その 2 年前に身体教育について講演した記録をボストンで出版している。これが 1834 年のコールドウェルの PE の単行本であったことが判明した。『体育の考え方：レキシントンでの教員研修で伝達されたディスコース』1834 年(Charles Caldwell(1834), *Thoughts on Physical Education: being a discourse delivered to a convention of teachers in Lexington*, KY. On the 6th & 7th of Nov. 1833)がそれである。この書は 1833 年 11 月 6 日と 7 日にレキシントンで開催された教員研修会での記録を文字おこししたものであった。1834 年の書は、講演記録に等しいが、1836 年にエジンバラで出版された書は、引用と理論背景の記述がなされていた。

さらに、ジェームス・チオッソの『体育に関する所見』1844 年(James Chiosso(1844), *Remarks on Physical Education*)にたどり着く。チオッソは、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ・スクールの体操教師であった。1800 年以降にイギリスに移入されたドイツ式体操の内容を記述しており、1820 年代後半のロンドンでロンドン体操クラブを主宰したカール・フェルカー(Karl Völker)にも言及されていた。

②スペンサーの三育主義教育にかかわる資料の遡及

スペンサーの『知育・徳育・体育論』1860 年 (Herbert Spencer(1860), *Education : intellectual, moral, and physical*)が世に出たのは、1860 年のアメリカ版であることが杉山英人氏によって指摘されている。イギリスでは 1 年遅れの 1861 年の出版となる。この書は、スペンサーが 1850 年代のイギリスの評論誌に寄稿していた内容の合本である。スペンサーは、ペスタロッチの教育を批判的に受けとめていた。いわゆるスペンサーのペスタロッチ批判である。このことは英語圏で出版されたビーバーのペスタロッチ批判の書『ヘンリー・ペスタロッチと彼の教育計画』1826 年の内容に基づいていた。

さらに、スペンサーが近代教育を知育、徳育、体育の３つの領域から考察した考え方の根源はどこにあったのかを原典で確認した。その点でスペンサーの資料の遡及調査が必要となった。今回は、スペンサーの著作の初期の段階の２つの資料である『政府固有の領域』1843 年（Herbert Spencer(1843), *The Proper Sphere of Government*）及び『発達仮説』1852 年 (Herbert Spencer (1852), ‘Development Hypothesis’, *The Leader* [March 1852])にまで遡って考察した。

いち早くスペンサーは『政府固有の領域』において「将来調和のとれた状態としての生活を営むために必要な諸能力を育成することが完全な生活への準備としての教育の役割であり、人間の能力をそれぞれの機能により分類したものが知識、道徳、身体なのであると説明した。また、スペンサーは、『発達仮説』においても同様に言及していた。スペンサーは社会学的も心理学的のも人間の能力を知的、道徳的、および身体的に高めることの重要性を指摘していた。

③スマイルズの身体教育論（1838 年）にみる知育，徳育，体育の相互連関

スマイルズに関しては、これまでも科研の研究で継続的に検討してきているが、特に、今回は三育主義とスマイルズの身体教育論との接点を探った。スマイルズの単行本『身体教育』1838 年においても、三育主義との関連が見いだせる。スマイルズによれば幼少の子どもの教育の目的は，疑いもなく徳性の涵養であると言わねばならないという。それは、幼児期や児童期に彼ら自身が成長するような愛情やより高い感性を引き出すためである。そして、子どもの成長を観察し、あるい

は適切な目的に向かって彼らを導かねばならないと考えていた。道徳的によくないことは抑制され、善いことはあらゆる資質が均衡がとれるように導かれているという。子どもたちは身体的に優れている点と同様，道徳的に優れている点をかなり自覚しているという。

また、自然の包括的な教育プログラムの中で，子どもたちはより良い知性を働かせ、高い目標をかなえるために入念に教育され訓練されなければならないという。そして、精神は、主として人間とは何かを深く考えるという前提があって、その後導かれるものであり、精神の教育の目的は知識を増大させ、我々の人類の幸福を促すものであるという。人間は特に自身の本性（ありのままの姿）と自身の知識、そして仲間の存在と関係について教えられなければならないとスマイルズは指摘していた。

(4) 三育主義の明治期日本への受容の一端としての身体教育とスポーツ

①明治初期の身体教育概念と西欧近代教育の影響―「體操術の世代」『學藝志林』明治12年12月所収）について―

「體操術の世代」は，創設期の東京大学で学生や教員が学習や研究の一端を記録したゼミ報告ともいえる冊子である。明治 12（1879）年に法学部に在籍していた学生が「體操術の世代」と題する英文を翻訳した記事を掲載していた。しかし，当該の「體操術の世代」（東京大学資料）の内容の詳細はこれまで研究対象にされていないようである。資料調査の過程で，原書にあたる英文文献の詳細もつきとめることができた。翻訳であるものの，身体教育の専門文献に由来する内容は，これまでギリシャ史からの断片的紹介のレベルをはるかに凌駕する内容であることが判明した。また，当該時代は，嘉納治五郎の東京大学在学時代にあたり，身体教育や古代オリンピックの情報がいち早く日本にもたらされていたことで当該資料は資料価値を有するものといえる。

②「體操術ノ世代」の原著者オスワルド

オスワルド(Felix Leopold Oswald)には、*The Popular Science Monthly* に数多くの寄稿論文がある。オスワルドは人間の精神や身体に関しても関心を注ぎ、『身体教育』1883 年(*Physical Education*, 1883)と題する単行本も出版しており、その書の 1883 年版は明治期の官立体操伝習所の蔵書本にもなっていた。オスワルドが人間の身体に寄せる関心は、1878 年 6 月に発刊された *The Popular Science Monthly* の雑誌に収録されている一篇のモノグラフ（論文）にも表われている。それが「體操術ノ世代」の原典である英語論文、“The Age of Gymnastics”であった。

「體操術ノ世代」の翻訳刊行当時の日本は、欧米の身体教育やスポーツの移入期にあたる。明治初期にはそれらを一部紹介した書籍や記事は既にみられるものの、近代の身体教育、とりわけ高等教育機関における体操の授業としての実施と奨励のなされていた当該時代に、東京大学で同論文が仮名交じりの和漢文で翻訳・紹介された意義は大きい。ことに古代ギリシャの時代の体操術と古代オリンピックをめぐる紹介内容は詳細であり、優勝者への葉冠授与や待遇などが仮名交じり和漢文で紹介された文献としてはその端緒に位置づくものではないかと推察される。さらに、欧米の身体教育の日本への紹介資料として、古代やローマに回顧しつつ、欧米で盛んなスポーツやその競技会への人々の熱狂ぶりをオスワルドは批判的にとらえている。また、競馬や闘鶏などギャンブル化した近代のスポーツ事情をオスワルドの眼からみれば、近代の時代であっても体操に着目すべきであり、近い将来は体操による身体教育の時代でなければならないと警鐘を鳴らしている。そのことにも資料価値を見いだした。

③明治初期のスマイルズ著『自助論』1867 年(*Self-Help*, 1867)と身体教育

『自助論』（中村正直は 1867 年版を翻訳していた）は、日本で翻訳された初期の文学作品であり，明治維新直後の 1871 年に中村正直の翻訳により『西國立志編』として紹介された。その中の記述でイギリス・スポーツの紹介がなされている。それは，身体の教化(physical culture)という観点での身体運動の重要性を指摘し，イギリス人の学者や文筆家が学問と共にスポーツ活動を熱心に実施していたことを伝えていた。

そこで、スマイルズの著した『自助論』の中での身体教育論とその中でのスポーツの記述を検討した。『自助論』の中で身体教育，あるいは身体を教化することをスマイルズはどのように説いているか、スポーツがどのように紹介されているか、中村正直は，それらをどのように理解し日本語に翻訳して紹介したのかを明きらかにした。

『自助論』の中では，自ら教化すること(self culture)が重要であり、活動すること（運動すること）が身体を教育すること(work educates the body)と定義づけられ、さらにスポーツ（遊戯）の重視について述べられていた。しかし、スポーツそのものが人間形成に寄与したり、スポーツによって資質が涵養されるという観点は看取できない。1871 年の段階で日本でも立身出世のために，スポーツの身体（教育）的な効用が説明されていた。スマイルズの身体教育論は、『自助論』の中でも脈々と語られていたといえる。

(5) 英語圏の古参の単行本

①コールドウェルの『体育の考え方』1836 年(Charles Caldwell の *Thoughts on Physical Education*, 1836)にみる身体教育論

コールドウェルは、1796 年ペンシルヴェニ

ア大学で医学博士の学位を取得していた。1819 年、フィラデルフィアを去り、ケンタッキー州レキシントンのトランスヴァニア大学に校医（大学医療スタッフ）として従事しており、医学、生物学（多元発生　polygenism）の専門家として知られていた。

コールドウェルとエジンバラの医学界をつなぐのは、いずれも人間の身体や体育（身体教育）に関する書物のエジンバラ版が見いだせるからである。コールドウェルの『体育の考え方』(1836 年)にも引用されていた同系列の書物には同時期の医学者であったロバート・コックス(Robert Cox) やジョージ・クーム(George Combe) の書が挙げられる。

②コールドウェルの身体教育論―三育主義における身体教育の位置づけをめぐって―

コールドウェルの『体育の考え方』(1836 年)には目次がない。緒言からまとめにかえてに至るまでに、多くの内容の羅列があり、同書はモノグラフの体裁がとられている。とりわけ重視したいのは、緒言から精神と身体の教育、精神と人間のありのままの姿、精神の改善、人間の身体機構、知的・道徳的教育と身体教育の関係、徳性と個人・身体教育の重要性等々、近代三育主義に関する記述がなされていることである。三育主義の教育における身体教育、道徳教育、知的教育の相互関係が端的に記述されているのは「知的・道徳的教育と身体教育の関係」及び「徳性と個人・身体教育の重要性」についての所見であった。

コールドウェルは、まず教育を身体教育と精神的教育というように２つに区分している。より正確には、身体的・道徳的・知的な教育というように３つに区分されるという。実際に、身体教育と道徳教育、身体教育と知的教育とで区別がなされるように、道徳教育と知的教育との区別もなされる。しかしながら、それらはいずれも３つが密接に関係しており、それらのうちのいずれかが向上させられると他の部分にも向上がみられる可能性があることを指摘している。身体教育のみを抽出することは適切ではないということになる。そして、人間の為す行為をそれぞれ、道徳的行為、知的行為と命名するが、身体教育は人間の組織のそれぞれの基礎となる部分や手段でもあるといい、身体的行為と命名している。人間の行為も、本質的に相互に関連づけられているし、他はより機構的に明確に結びつけられているという解釈が成り立つ。

③コールドウェルの身体教育単行本の小括

コールドウェルは、身体の仕組みや機能と共に、知的、道徳的、あるいは身体的に教育する必要があると説いていた。教育の三育主義的な考え方は、西欧で PE と題する初期の単行本であるコールドウェルの文献の中からも読み取ることができる。養生的な身体運動ではなく、身体教育は訓練と指導が必要であると説明されていた。教育の中での３つの契機、知的教育、道徳教育、身体教育の相互連関を問わなければならない。PE の源流を探る研究に着手するとき、コールドウェルとそれにつながる理論背景を考察することは、研究上の意義を見いだせる。

医学者による養生的な運動から、人間形成にとって、つまり教育にとって運動が必要であるという変化の過渡期はいつごろの時代に措定できるかという点に研究視座を据えて、さらに遡及して資料にあたる必要があろう。

(6) 研究成果の総括

これまで教育学の中で三育主義を称揚するために、スペンサーの『知育・徳育・体育論』が注目されてきた。しかし、西欧三育主義の記述上の端緒を探るとペスタロッチとそれにつながる人々の体育論やその主張、あるいは実践が存在し、やがてスペンサーにたどりつくまでの系譜が明らかになりつつある。

一方で、体育が三育主義の１つの枝葉として把握されてきたことは、教育の中での体育の位置づけを明確にしてきた。今日の学習指導要領解説総則編にも三育主義教育は謳われている。問題は、知育、徳育、体育が独立した領域であるかのようにみなされていることである。確かに、それぞれの領域は教育を語る場合の契機となるが、今日の体育授業にみるように体育にも知識や態度が深く関連しているのである。したがって、３つの領域が相互に関連し合っているように重層的に考察しなければならない。近代初期の教育は、なおさらそうした傾向が強かったのである。近代の身体教育論は固有の領域のようにみられがちであるが、現代の体育にとっては知識の教育や徳性の教育がバックボーンになっているのである。

身体教育も教育との関連で語られ、説明されてきている。身体教育に関わる識者や論者は、常に教育を念頭に置き、その内容を説明してきたといえる。人間としての生き方や生活の中での身体への関心を注ぐことをねらいとして身体教育をとらえてきているのである。

〈引用文献〉

① 坂田祐子、『Pestalozzii の Elementargymnastik に関する研究』、奈良女子大学文学部卒業論文、1987 年

② 杉山英人「英国における体育概念～その特質としてのスペンサー」、体育原理専門分科会編、『体育の概念』、不昧堂出版、1995 年、pp.64-82.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 榊原　浩晃、予備的ノート：Charles Caldwell の Thought on Physical Education(1836)―近代三育主義教育における身体教育の位置づけをめぐって―、健康・スポーツ科学研究、査読無、第３号、2015 年、43-48

② Hiroaki Sakakibara, A Brief Paper:The introduction of European and American Physical Education in early modern Japan―With Reference to F.L.Oswald's The Age of Gymnastics(1878) and It's Japanese translation―, 健康・スポーツ科学研究、査読無、第 2 号、2014 年、43-47

③ 榊原　浩晃・田端　真弓、欧米の身体教育の日本への紹介資料―「體操術ノ世代」（明治 12 年）の校注作成―、福岡教育大学紀要、査読無、第 63 号、第 5 分冊、2014 年、33-52
http://hdl.handle.net/10780/1581

④ 榊原　浩晃, Samuel Smiles; Physical Education(1838)にみる身体教育論―身体教育と知的教育および道徳教育の関連に関する予備的考察―、健康・スポーツ科学研究、査読無、第 1 号、2013 年、1-8

〔学会発表〕（計 7 件）

① 榊原　浩晃、三育主義の体育の位置づけに関する書誌的検討、九州体育・スポーツ学会第 63 回大会、2014 年 9 月 14 日、「別府大学（大分県・別府市）」

② 榊原　浩晃、Charles Caldwell の Thought on Physical Education(1836)にみる身体教育論―身体教育における身体と精神の検討―日本体育学会第 65 回大会、2014 年 8 月 28 日、「岩手大学（岩手県・盛岡市）」

③ 榊原　浩晃、西欧三育主義教育における身体教育の系譜、筑波大学体育・スポーツ史研究会、2014 年 3 月 2 日、「筑波大学体育史・スポーツ人類学研究室（茨城県・つくば市）」

④ Hiroaki Sakakibara, The introduction of F.L.Oswald's The Age of Gymnastics(1878) into modern Japan, 国際体育・スポーツ史学会、2013 年 8 月 20 日、「台北市（台湾）」

⑤ 榊原　浩晃、Felix Leopold Oswald; Physical Education(1882)にみる欧米の身体教育と東洋への眼差し、日本体育学会第 64 回大会、2013 年 8 月 30 日、「立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県・草津市）」

⑥ 榊原　浩晃、創設期の東京大学における身体教育と古代オリンピック情報、日本体育学会第 63 回大会、2012 年 8 月 24 日、「東海大学湘南キャンパス（神奈川県・平塚市）」

⑦ Hiroaki Sakakibara, A Historical Study of the Aspects of Sport and Physical Activities in Samuel Smiles' Self-Help (1859) and it's reception during the Early 1870s in Japan, 国際体育・スポーツ史学会、2012 年 7 月 10 日、「リオデジャネイロ市（ブラジル）」

〔図書〕（計 1 件）

① Hiroaki Sakakibara, A Historical Study of the Aspect of Sports and Physical Activities in Samuel Smiles'SELF-Help(1859) and Its Reception in Early 1870s Japan, Annette Hofmann, Sebastiao Votre et al. Physical Education and Sport around the Globe -Past, Present and Future-, 2013 年、ガマフィーリョ大学出版局、リオデジャネイロ（ブラジル）、総ページ数 476（分担執筆 327-336）

６．研究組織

(1)研究代表者

榊原　浩晃（SAKAKIBARA, Hiroaki）
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：　５０２５５２２０

(2)研究協力者

阿部　生雄（ABE, Ikuo）
筑波大学・名誉教授

田端　真弓（TABATA, Mayumi）
九州大学・健康科学センター・学術協力研究員
（平成 24 年度のみ研究協力者）